

その教会は都市を中心としていたのですから、勢い、都市は教会に頼らざるを得ず、教会が否も応もなく都市の強大な支配者となりました。

とはいえ、ヨーロッパの都市は何時までもこうした支配に甘んじていたわけではありませんでした。やがて実力を自覚した市民が、結束して権力支配を排除し、自治を獲得致しました。この点にこそ、ヨーロッパ中世都市の最大特色があり、こうした状況は特にドイツにおいて明確に認められます。以下、ドイツを中心に、スライド映写を通じて、ヨーロッパ中世都市の本質を視覚的に御説明申し上げます。(以下スライド上映)

平成10年

◎6月24日

EUの日本セミナーに出席して

和田 俊

今年(1998年)の6月、欧州連合(EU)の日本セミナーに出席するため、ブリュッセルに行ってきた。

時差調整もかねて、ロンドンに立ち寄って、イギリスの空気を少し吸った。ロンドンはどちらかといえば保守的な町で、大きな様変わりはないけれども、時に「へえっ」と驚くこともある。今回はヒースロー空港からロンドンのパディントン駅まで、快速電車が走るようになって「イギリスもなかなかやるな」と感心した。乗車の時間はわずか15分。とにかく速い。わが国の成田-東京間を思えば、なんとも羨ましい。

ロンドンではいつも、パルマル街のリフォーム・クラブに泊まる。長い伝統を持つ紳士クラブで、ここにくると、時間が百年はとまっているのではないか、という気がする。

図書室やスモーキング・ルーには、革表紙の書物がぎっしりと並んでいて、いつも森閑としてい

る。イギリス人はクラブ愛好人種で、仲間クラブという巣をつくり、そこで食事をしたり、1杯飲んだり、歓談したりして楽しむ。その一方で、背広、ネクタイ常時着用といった規則を自分たちでつくり、社交が乱れないように枠をはめるのだ。

このクラブの古典的なイギリス紳士たちは、大陸のことを「ヨーロッパ」と呼ぶ。フランス、ドイツなどから、自分たちをはっきりと区別しているのだが、そうした態度は欧州連合内で、時にイギリスを孤立させる。

欧州連合は99年1月から、共通の通貨「ユーロ」を実際に使用することに決めている。初めは銀行間の取引だけで、庶民が「ユーロ」紙幣を手にするのは、三年先になるが、実に画期的な実験である。

ただ、イギリスはこれに当面参加せず、様子見の姿勢である。世界一の金融市場シティを持っている誇り、栄光のイギリス・ポンド死守といった感情が背景に見え隠れする。

しかし、時代の潮流はイギリスに不利に動いている。労働党のブレア政権は遠からず「ユーロ」に参加する方向で、国民投票に訴えることを決めている。もし、大陸と別の道をとれば、将来の金融市場がロンドンから、フランクフルトなどに移っていくことは目に見えているのだから、経済の実務家たちにはあせりもうかがえる。

共通通貨制度が順調に歩みだせば、21世紀のヨーロッパは新たな躍動を開始しそうだ。そのとき、アジアの経済大国日本とどんな関係を結ぶのがもっとも望ましいか。ブリュッセルでの日本セミナーの関心も、そのあたりにあったようだ。

日本に関わりのある学者や官僚が集まったが、わが国の労働市場の変化、少子化や高齢化といった社会問題など、日本の事情についてはかなりよく研究されているようであった。

さて、日本の側の対応はどうか。経済界の人々ですら、「ユーロ」といっても、「対岸の実験」ぐ

らいにしか考えていないようにもみえる。国内の金融不安にのみ目がいていて、相変わらずの視野の狭さが気にかかる。

平成10年

◎10月28日

共同研究 (B) 中間報告

英米文学批評における現代思想 — 脱構築批評を中心に

上 村 仁 司

アメリカにおける20世紀の英米文学批評の流れは、ニュー・クリティシズムに始まり、マルクス主義批評、シカゴ派、神話・原型批評、現象学批評、解釈学、読者反応批評、構造主義、記号論、脱構築批評、フェミニズム批評、新歴史主義、を経過してカルチュラル・スタディーズへと達した。この流れの源であるニュー・クリティシズムの特徴として次のような点が考えられる。「書物そのものへ帰ること、テキストそのものが批評の中心であること、従って批評家が集中しなければならないのは、テキスト自体の「内部的生命」であり、批評家の判断のよりどころは、文学作品が持つはずの固有の客観性である。」しかし「新批評はやがて画一的になり、そこからの脱却がはかられた」(川口喬一『文学の受容』研究社)。従って、ニュー・クリティシズム以降の批評はこの画一性を打破するものであり、その特徴は多元性であると言える。その中でも脱構築批評 (Deconstruction) の多元性は現代思想に由来する部分が多い。ニュー・クリティシズムと脱構築批評はテキストに集中して、作者の伝記的要素や時代背景を考慮しないという点では共通しているが、ニュー・クリティシズムが作品を意味の充満した有機的世界と見なすのに対して脱構築批評はテキストを意味の欠如した世界、シニフィアン戯れの場として見た。こ

のテキスト観は現代思想でも特に構造主義に依るところが大きい。

構造主義を文学批評との関わりにおいて見た場合重要なのは、ジャック・ラカン、ジャック・デリダ、ロラン・バルト、ミッシェル・フーコーなどであろう。構造主義の源流はソシュールの言語理論にあり、特にシニフィアン (能記、記号表現)、とシニフィエ (所記、記号内容) が重要であると言われる。フロイト派精神分析学者であるラカンは、『エクリ』の巻頭論文「盗まれた手紙」についてのセミナーにおいて、ポーの「盗まれた手紙」を題材にして、構造主義的テキスト読解のモデルを示した。また、デリダの、「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」(1966)と題された論文はアメリカにおける文学批評に大きな影響を与えた。デリダ理論の「枢軸的テーマ」は「テキスト外なるものは存在しない」という言葉に集約される (エイブラムズ『ポスト構造主義との対話』平凡社)。記号論を流行させたバルトはバルザックの中編小説「サラジヌ」を自らの理論で詳細に科学的に分析した。また、構造主義を社会学研究に応用したミッシェル・フーコーは「社会およびその言説のなかに作用している肉体を離れた「権力」に注目し、「個人が権力を行使するのではない。個人は権力の一効果であり、権力によって構成され、同時にそれを運ぶものである」と考えた (エイブラムズ)。

こうした構造主義の考え方は脱構築批評に受け継がれる。バーバラ・ジョンソンは脱構築批評を「テキスト自体の内部で相争う意味作用の諸勢力を入念に解きほぐすこと」と定義している。(大橋洋一他訳『差異の世界』紀伊国屋書店)。脱構築批評の特徴は、言語の使用に関する準拠枠の転換にあると言えよう。つまり、構造主義やポスト構造主義の理論家は考究の立脚地を、言語が現に使われている人間世界に置かず、言語一般、あるいは言説そのものという抽象的領域のなかに置く